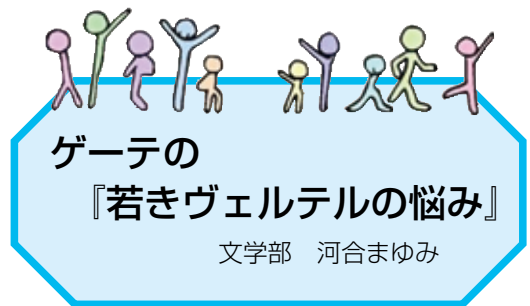


の演出で『サロメ』の上演がかなふことになった。刮目すべきは、三島が日夏耿之介の『サロメ』訳を台本に選んだことである。その理由は、「この字面のむやみとむづかしい翻訳が、耳から入つて来ると、實になめらかに、わかりやすいセリフ」になつたからである。音読すると「力があり、リズムがあつて、直に心に觸れて来る名譯」だと言ふ。耿之介にはワイルドの文体の魂を日本語に移し替へるだけの技倆が具はつてゐた。「かたち^{かたち}に因つて、こころ^{こころ}を忍ばん」とする藝術観をもつ耿之介は、「詩技の事は稟性神賜」と心得、「民主的時代の衆民は心より藝苑に至るの道^{みち}を知らぬ誼^{ことば}はれた思想上の賤民」であると断じた。かうした言葉には、「藝術を最高の現実」として扱い、「我々^{われら}に関はらないもののみが美しい」と言つたワイルドの反響さへも感じられる。殆どワイルドと揆を一にする藝術的立場を取る者にして初めて成し得た訳業であつたと言へる。

かつてウォルター・ペイターの『ルネサンス』をスウィンバーンの詩の一節を借りて、「精神と感覚の黄金の書、美の聖典」と称揚したワイルドはなほも後年獄中で、「私の人生にかくも不思議な影響を及ぼしたあの本」と、『ルネサンス』の及ぼした薫習^{くんじゆ}の深さを追懐したのであつた。ワイルド藝術はペイターの藝術思想に培はれ開花を見た。その根本的思想は何かと言へば、古代ギリシアのエピク로스哲学に他ならない。キリスト教とは全く相容れないエピク로스思想は、人生観としては十六世紀になつてフランスのモンテーニュの『随想録』において甦へり、その原子論は十七世紀前半、同じくフランスのピエール・ガッサンディによつて掘り起こされニュートンもそれを受け継いだ。藝術思想としては十九世紀後半英国のペイターによつて復活したのであつた。その中枢をなす考へ方は、感覚に従つて見るべし、自然に服従すべし、心境の平静即ちアタラクシアを保つべし、この三点に尽きる。日本人にとつては当たり前の思想でも、キリスト教社会においては、ペイターは異端者として疎まれ、ワイルドは社会から抹殺された。

ワイルドと肉慾で繋がつた三島は、当然ペイターと無関係ではあり得ない。ゆくりなくも「不

思議な影響」の源に踏み入つた。『ルネサンス』に代表されるペイター藝術は、ゲルマン的象徴思考とギリシアの合理主義思考との融合形態の実現を目論むものである。三島は『貴顕』においてペイターに倣ひ、「微妙な寫實と透明な抽象性」とが入り混じりつつ、最終的には明確な輪廓を結ぶことのない表現形態を試みたのである。とまれ、三人共に偽善の社会に厳格な言葉の形を示しつつ、なほも形なるもの無であることを明らかにした。



ドイツ文学を代表する文豪といえば、ヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテである。そのゲーテが24歳のときに書いたのが『若きヴェルテルの悩み』で、1774年に出版されるやドイツで大ベストセラーとなり、各国語に翻訳され、ゲーテの名をヨーロッパ中に知らしめることとなった。かのナポレオンもこの本を愛読したそうである。一般には「恋愛小説の古典」と見なされているが、そこで描かれているのは単なる恋愛にとどまらない。

この作品は、主人公ヴェルテルが友人ヴィルヘルムに宛てた手紙からなる書簡体小説で、読者は作品を読みながら、恋する主人公の喜びや苦しみをともに味わうことになる。まず作品の前半、ヴェルテルは、訪れた地方の町でロッテという女性と出会い、たちまち心を奪われる。彼女にはすでにアルベルトという婚約者がいたが、不在であったため、ヴェルテルはますます彼女に魅了されていく。彼女は、亡母に代わり家事をこなし、幼い弟妹の面倒を看る家庭的な明るい娘であった。ロッテが舞踏会のための服装で弟妹たちにパンを切り分けてやる象徴的な場面は、後述するオペラや映画でも必ず登場する。またロッテは、当時の女性にはめずらしく、

読書を好み、自分なりのしっかりとした考えを持っていたことも、出会った当初のヴェルテルを驚かせた。そこに婚約者アルベルトが戻ってきて、いわゆる三角関係になる。このアルベルトが嫌な奴であったらヴェルテルにもまだ救いがあったのかもしれないが、彼は非の打ち所がない人物だった。落ち着きのある性格といい、出世を約束された立場といい、ヴェルテルとはまさに対照的であった。二人の間に自分が入り込む余地はなく、しかしロッセへの恋心を抑えることのできないヴェルテルは逃げるようにその地を去る。以上、作品の第一部はほとんどがゲーテの実体験をもとに書かれている。大学での学業を終えたゲーテは、父親の命で、帝国大審院での実習のため田舎町ヴェッツラーへ赴いた。そこでロッセのモデルとなったシャルロッセ・ブッフと知り合い、恋に落ちた。彼女には許婚のケストナーがいることを、ゲーテは知らなかったのだ。このケストナーは優れた人物で、当地でのゲーテの友人であった。シャルロッセへの思慕の情を抑えきれなくなったゲーテはひそかにヴェッツラーを去るが、この二人との交際はその後も続いた。

物語の後半、ヴェルテルは別の土地の公使館で秘書として働き始めるが、上司も同僚も官僚主義にこりかたまつた俗物ばかりで、ただ耐え忍ぶばかりの日々を過ごす。唯一親しく付き合い合えた伯爵のもとでも、彼は侮蔑的な身分差別に会う。ついに退職を願い出たヴェルテルは、失意のうちにロッセのところへ戻ってくるが、彼女はすでにアルベルトと結婚しており、以前のような付き合いは考えられなかった。周囲の人たちとの溝が深まり、精神的に追い詰められたヴェルテルは、クリスマスの前日、ついに感極まってロッセにキスしてしまい、もう二度と会わないと宣告される。その夜、彼はアルベルトから借り受けたピストルで自殺するのだった。作品のこの第二部では、恋愛よりも社会批判が主題となっている。当時はまだ厳格な階級社会で、ゲーテと同じく市民階級出身のヴェルテルは、身分の壁や旧態然とした官僚主義に突き当たり、死へと追い込まれていく。キリスト教では自殺は許されないことであった。ヴェルテルとアルベルトが自殺について言い争う場面

があるが、自殺は人間の弱さにすぎないと切り捨てるアルベルトに対して、その情熱が限度を越えると人は死なざるを得ないとヴェルテルは真っ向から反論する。現実のゲーテは、もちろん自ら命を断つことなく、恋の苦悩を作品に書くことで昇華し、内面の危機を克服した。ゲーテがヴェッツラーを去った後、大学時代からの友人であるイエルーザレムが、人妻への恋にやぶれ、ケストナーから借りたピストルで自殺するという事件が起きた。この出来事にヒントを得てゲーテは作品を完成させたのである。この作品が世に出ると、前述のように大反響を引き起こした。ヴェルテルと同じ服装が流行り、彼をまねて自殺する若者が多くあらわれ、一時は出版が禁止されもした。当時の閉塞した身分社会、キリスト教社会に追い詰められた若者たちにとって、この作品は束縛からの解放を意味したのである。現在、古典として『ヴェルテル』を読む皆さんは、当時とは全く異なった時代、社会に生きているわけだが、自分の心情のみに従って生きようとするヴェルテルの姿に共感できる場所があるはずである。

この作品は、うれしいことに、映画やオペラでも楽しむことができる。2010年の映画化『ゲーテの恋』では、ヴェルテルがゲーテ自身と設定され、ゲーテとロッセは相思相愛になって一度は結ばれる。原作の第二部が第一部に混ぜ込まれ、恋敵のケストナーがゲーテの上司という設定になっているのも面白い。当然、主人公ゲーテは自殺の寸前まで追い詰められても、実行はしない。映画の結末は、『ヴェルテル』が世の注目を集め、ゲーテが作家として一歩を踏み出すというハッピーエンドである。一方、フランスの作曲家マスネによるオペラ『ヴェルテル』も有名である。セリフがフランス語なのが残念であるが、多くDVD化されているので、舞台演出の違いを見比べるのも楽しい。オペラと原作の大きな違いは、ロッセが最初からヴェルテルに恋愛感情をいだいていて、結末、ピストル自殺を図り血まみれのヴェルテルに、ずっとあなたが好きであったと告白することである。こうした映画やオペラを通して、古典の新しい魅力を発見するのもおすすめである。